様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０５５８

研究課題名（和文）英語におけるway表現の「例外的」用法に対する語彙・構文論的分析

研究課題名（英文）A lexical-constructional approach to "exceptional" way expressions in English

研究代表者
岩田　彩志（Iwata, Seizi）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：５０２３２６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　先行研究では、way表現は(1)主語と所有代名詞とが同一指示であり、(2)主語は自己推進力を持っていなければならず、(3)経路句は必ず存在する、とされてきた。しかしこれらの制約に対する例外が存在する。これらの一見例外と思われる事例を詳しく調べてみた結果、以下のことが判明した。(1)動詞事象と移動事象は「手段」でなく「可能化」で結びついている、(2)動詞の果たす役割は、これまで考えられてきたよりもずっと大きい、(3)語彙的な移動様態動詞(walk, roll)との並行性も考慮する必要がある。

研究成果の概要（英文）：There are way expressions that appear to be exceptional with respect to the following points: co-referential requirement between the subject and the possessive; self-propelled motion; and obligatory path PPs. It turns out that these apparently exceptional cases arise from a complex interplay of various factors, however. Accordingly, the following characteristics of way expressions need to be recognized: The verbal event and the motion event are related via “enablement” rather than “means”; the contribution of verb meaning is far greater; and way expressions are fundamentally the same as lexical manner-of-motion verbs like walk and roll.

研究分野：人文学

キーワード：項構造　語彙意味論　構文理論　語彙・構文論的アプローチ

１．研究開始当初の背景

近年の語彙意味論において Goldberg (1995) の提案している Construction Grammar（構文文法）による分析が大きな流れとなっている。しかし Goldberg の分析では構文の役割を強調するあまり、動詞自体の役割が過小評価されているきらいがある。Jackendoff (1990), Pinker (1989), Levin & Rappaport Hovav (1995)といった生成理論内での語彙意味論研究の知見をもうまく取り込めるように、理論を修正・発展させていく必要がある。

研究代表者は、このような観点から研究を進めてきた結果、従来の生成語彙意味論的分析とも、Goldberg 流の構文分析とも違う、語彙・構文論的分析という独自の理論を展開するに至っている。その成果は、隔年で開催されている国際構文理論学会で発表されている（2001 年（バークレー、アメリカ合衆国）, 2002 年（ヘルシンキ、フィンランド）, 2004 年（マルセイユ、フランス）, 2006 年（東京、日本））、2008 年（テキサス・オースティン、アメリカ）、2010 年（プラハ、チェコ）、2012 年（ソウル、韓国）、2014 年（オスナブリュック、ドイツ）。また English Language and Linguistics (2004), Cognitive Linguistics (2005), Language Sciences (2006), Linguistics (2008)といった海外の一流の学術雑誌にも論文が掲載され、海外の学者にも高く評価されている。

このような独自の理論の妥当性をさらに検証し、理論としてさらに発展させていくために、Goldberg 流の分析で上手く説明出来るとされている way 表現を次なる研究対象として選んだ。

２．研究の目的

Goldberg (1995)の Construction Grammar（構文文法）による分析は英語の way 表現（He forced his way through the crowd）に対して妥当であるとされてきた。しかし、実例を調べてみると、Goldberg の理論では一見例外と思われる現象がいくつもある。これらの事例は、単に「例外」として片付けるにはあまりにも数が多い。また「例外」とされるものが、特定の動詞に多く見られる。恐らくは、これらの「例外」的な way 表現は正に動詞の性質のゆえに例外となっている可能性がある。とすれば、way 表現においても動詞の働きが重要であることになり、正に語彙・構文アプローチの主張がここでも裏づけられることになる。

従来の分析にとって「例外」とされる場合を中心にして、具体的な事例を丹念に調べることを積み重ねていくことにより、way 表現の真の姿を明らかにするのが本研究の目的である。

３．研究の方法

言語学関連図書の知見とコーパスの両面を活用して、way 表現の例を出来るだけ広い範囲から集めた。先行研究で挙げられている作例を基にしてコーパスや web を活用し、どのようなタイプのデータがあるかだけでなく、どれくらいの頻度で生じるか、も調べた。収集したデータは、これまで明らかになった語彙・構文論的アプローチの知見に照らしてその理論的意味合いを整理していった。

４．研究成果

(1) 同一指示制約

これまでの way 表現の先行研究(Jackendoff 1990, Goldberg 1995)では、主語と way の前に現れる所有形は必ず同一指示であるとされてきた（Bill belched his way into the room/*Bill belched Harry’s way into the room)。しかし British National Corpus や Wordbank Corpus を使って検索してみると、反例が存在する(The Japanese paid his way to Japan)。これらの反例を説明しようとすると、次のように分析をする必要がある。

まず形式と意味の対応に関して、[主語＋動詞＋所有代名詞＋way＋経路句]という形式

のうちで[主語＋動詞]が動詞事象を表し、[所有代名詞＋way＋経路句]が移動事象を表わす、と考えなければならない。次に意味構造において、動詞事象は移動事象を「可能にする(enabling)」関係にある、と分析しなければならない。

さらにこれらの分析が、実はこれまでの分析で扱えるとされてきた例にもあてはめることが出来る。すなわち、[主語＋動詞]が動詞事象を表し、[所有代名詞＋way＋経路句]が移動事象を表わす。そして、これまで先行研究は動詞事象が移動事象に対して「手段(means)」の関係にあるとしてきたが、「可能化」で押していくことが出来る。寧ろ、「可能化」の方が「手段」よりも上手く way 表現の性質を捉えているとさえ言える。

(2) 移動の自己推進性

Goldberg (1995)は、way 表現の主語が自らの力で動くものでなければならないと主張しているが、find one's way がその例外に当たることを認めている(About half its sacred textiles had been smuggled out of Bolivia and had *found their way into American collections*)。Goldberg (1995)はこれを語彙的な例外として片づけているが、コーパスデータを基にして調べてみると以下のことが判明した。

まず find one's way には二種類ある。一つ目は volition タイプで、主語は意図的に自分の進む経路を少しずつ見つけながら、進んで行く(He was *trying to find his way* back)。このタイプは他の多くの way 表現と全く同じで、動詞事象が移動事象を「可能にする(enabling)」関係にある、と分析できる。

二番目は、'end-up-with'タイプで、無生物主語が自ら動いていないにもかかわらず、ある場所にあるのが発見される、という意味を表す。これが例外的とされる用法である。しかし実は動詞 find の性質から、このタイプの特性を導くことが可能である。Find は achievement verb であり、終着点のみを表す意味を持つからである。また幾つかの移動動詞は、無生物主語が、気が付いてみたらある場所に収まっていた、という意味を表すことが出来る(*Some of the money went into the pockets* of individuals)。find one's way の例外的特性は、これら二つの要因が絡み合った結果生じるものとして分析できる。

(3) 経路句の義務性

Goldberg (1995)の理論に厳密に従えば、way 表現は[主語＋動詞＋所有代名詞＋way＋経路句]という形式を必ず備えていなければならない筈である。しかし British National Corpus や Wordbank Corpus を使って検索してみると、pay one's way では経路句無しの実例が見つかる（I can pay my way）。しかも単に例外として扱う訳にはいかない程、数が多い。BNC では全 92 例中 86 例（93.5%）、Wordbank では全 124 例中 91 例（73.4%）で経路句が無かった。

興味深いことに、これらの例は殆どが「（買い物等をして）経費を払う」という意味を表していることが判明した。つまり移動が関わらずに動詞事象だけの意味から成り立っていることになる。

では way 表現は基本的に移動表現である筈なのに、なぜこのようなことが可能になるのか？実は正に way 表現を移動表現の一種とみなすことにより、その答えが得られた。移動様態動詞には、walk のように動詞が移動を含意するタイプと、roll のように動詞自体が移動を含意しないタイプがある。前者のタイプでは経路句を省略しても移動の意味は残る（He walked along the street/He walked）が、後者では経路句を省略すると移動の意味はなくなる(The ball rolled down the hill/The ball rolled)。通常の way 表現は、walk タイプと同じく経路句を省略しても移動の意味が残る（She got up, elbowing her way, pushing past

them)。しかし pay one's way が roll タイプと同じであるとすれば、経路句が無いと移動を表さないのは何もおかしいことではない。

以上のように、一見「例外」とされてきた way 表現を深く掘り下げて分析することにより、way 表現の本質に関わる知見が得られた。同一指示制約の例外から、動詞事象と移動事象を関連付けているものが、より正確には「可能化」であることが判明した。また移動の自己推進性の例外とされたものは、動詞 find の語彙的特性と動作主を背景化するタイプの移動とが絡み合った結果である。さらに経路句の義務制に対する例外も、移動様態動詞との平行性を考慮すれば無理なく説明できる。

これらの知見を基にして、これまでの先行研究とは異なる、真に妥当な way 表現の説明理論を構築することが期待できる。まず動詞事象と移動事象が「可能化」で結びついている、という結論をさらに押し進めていけば、そもそも way 表現における統語と意味の対応も見直すべきでないか、という方向性が見えてくる。また第二・第三の知見はいずれも、way 表現と移動動詞との平行性を強く示唆するものである。第一の知見と併せると、way 表現とは complex verb（複合動詞）として分析すべきでないか、という結論が導かれる。これは way 表現を結果表現と同じく項構造構文と分析する先行研究（Jackendoff 1990, Goldberg 1995）とは根本的に異なる立場である。way 表現にはまだまだよく分かっていない事実が多数あるが、この方向で研究を進めていけばそれらの解明にもつながるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① IWATA, Seizi Going further and further astray: Why a loose explanation never becomes tight. Language Sciences 45, 2014, 査読有、135–151. DOI: 10.1016/j.langsci.2014.06.019

② IWATA, Seizi Aspect and force dynamics: Which is more essential to resultatives? English Linguistics 31, 2014, 査読有、234-263.

③ IWATA, Seizi 'Tight links' make convenient metaphors but loose explanations: Replying to a reply. Language Sciences 42, 2014, 査読有、15–29. DOI: 10.1016/j.langsci.2013.11.002

〔学会発表〕（計 6 件）

① 岩田彩志　形容詞結果句と前置詞結果句、2015 年 11 月 21 日　第 33 回日本英語学会　関西外国語大学（大阪）

② IWATA, Seizi Resultatives and domains: The cases of fake reflexives with *eat* and *drink*. Sixth Biennial International Conference on the Linguistics of Contemporary English. 2015 年 8 月 22 日 University of Wisconsin-Madison. US of America

③ 岩田彩志　Biscuit conditional 再考、第 42 回市大英文学会、2014 年 11 月 29 日、大阪市立大学　（大阪）

④ 岩田彩志　*He laughed his head off* --語彙・構文的アプロー、第 35 回筑波英語学会、2014 年 11 月 22 日、筑波大学　（茨城）

⑤ IWATA, Seizi Where does *Princess Anne rode (the horse) to victory* come from? Eighth International Conference on Construction Grammar. 2014 年 9 月 3 日、Osnabrueck University. Germany.

⑥ IWATA, Seizi *Eat one's way*: A lexical-constructional account. Fifth International Conference on the Linguistics of Contemporary English. 2013 年 9 月 27 日、University of Texas, Austin. US of America

６．研究組織

(1)研究代表者

岩田　彩志（IWATA,　Seizi）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：50232682